



TITLE:

『農桑輯要』からみた大元ウルスの 勸農政策（上）

AUTHOR(S):

宮, 紀子

CITATION:

宮, 紀子. 『農桑輯要』からみた大元ウルスの勸農政策（上）. 人文學報
2006, 93: 57-84

ISSUE DATE:

2006-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48679>

RIGHT:

『農桑輯要』からみた大元ウルスの勸農政策 (上)

宮 紀 子

一. は じ め に

モンゴル時代の東西——大元ウルスやフレグ・ウルス治下では、農業振興策、それに関連して水利、救荒事業が政府の主導によって未曾有の規模でおしすすめられ、各種の技術書が編纂された¹⁾。

じっさい、『元史』卷九三「食貨志」《農桑》は、その冒頭において

世祖即位の初め、¹ 首²ず天下に詔するに「国は民を以て本と為し、民は衣食を以て本と為し、衣食は農桑を以て本と為す」²⁾ と。³ 是に於いて、『農桑輯要』の書を民に頒し、民を俾て本を崇め末を抑えしむ。其の睿見、英識たるや古先の帝王と異なる無し。豈に遼、金の能く比すべけん哉。

と讃え、そのあと世祖クビライから文宗トク・テムルまでの政策を列举する。

ただし、周知のように、『元史』の志のほとんどは、至順二年(1331)にトク・テムルの命令で編纂、当時の政治事情が濃厚に反映される『経世大典』の記事を、さらに明洪武年間の編纂官たちが不十分な知識、理解のもとに、適当に省略、改竄しながら引き写したものである。「食貨志」《農桑》はもとより、統括機関たる大司農司について解説する卷八七「百官志」は、きわめて大雑把な記述であり、またすべて真実を語っているわけではない。ときには意図して書かれていないこともある。さまざまな形で勸農に携わったその他の行政機関についても同様である(『実録』をもととする「本紀」も、クビライとその子チンキムの確執をはじめさまざまなタブーがあり、事情は似たり寄ったりである)。「芸文志」に至っては、作製すらなされなかったもので、とうじ果たしてどれだけの技術書があったのかさえわからない³⁾。現存する三種の農書——大司農司『農桑輯要』、そしてその成果を踏まえた王禎『農書』、魯明善『農桑衣食撮要』は、科学技術史からの研究、分析がそれなりになされている。しかし、書物成立の背景やとうじそれらが現場でどのように用いられたのかについては、あまり注意が払われていない。

大司農司がいかなる経緯のもとに設立され発展した機関なのか、整理、把握していなければ、大元時代の農桑、水利、義倉をはじめとする救荒事業を理解することは不可能である。ぎゃくに農桑、水利、救荒事業の実態を知らなければ、大司農司の真の理解には繋がらない。くわえて、この大司農司は、“社学”の振興も職掌としており、じつは、この時代の文化史を研究する上で避けてとおることができない機関のひとつでもある⁴⁾。

したがって、本稿では、作業の手始めとして、まず『農桑輯要』のいくつかの版本を軸に「食貨志」《農桑》および「百官志」を読み直し、その文脈の中で同時代の勸農政策と技術書をいまいちど眺めてみたい。

二. クビライ時代の勸農政策

ヴェールを脱いだ高麗版『農桑輯要』

『農桑輯要』は、後世の農書に多大な影響を与えたにもかかわらず、ながらく『永樂大典』卷六三八、六三九（のち散逸）から採録した『四庫全書』、『武英殿聚珍版』の粗悪なテキスト、明の胡文煥の『格知叢書』本を使用するしか術がなかった⁵⁾。

ところが、大元ウルスの駙馬国であった高麗では、明の洪武五年すなわち恭愍王の二一年（1372）に、『元朝正本重刊農桑輯要』を慶尚南道江陽（現在の陝川）で開板していた。卷首に至治壬戌（二年 / 1322）秋九月蔡文淵の序、至元癸酉（十年 / 1273）九月の王磐の序、卷尾に至元十年八月の孟祺の後序、後至元二年（1336）の辰州路総管府（湖広等処行中書省、江南北道肅政廉訪司の管轄）の重刊後序、高麗の文官である李穡、僕長寿の後序二通が付される。韓国にのこる数本のテキストは、書誌情報のみが知られ、実物はいずれも非公開であった。三木栄、天野元之助によってはやくからその重要性が推測されていたながらも、1990年に現物を調査した金容燮の報告が出るまで、いわば幻のテキストであった⁶⁾。もっとも、蔡文淵の序は『国朝文類』卷三六「農桑輯要序」、王磐の序は『四庫全書』本『農桑輯要』の卷頭、李穡の序は『牧隱文藁』卷九「農桑輯要後序」によって、容易にその全文を見ることが可能である。しかし、孟祺、辰州路総管府の序は、管見の限りではどこにも移録がなく、金容燮もそれが故に報告の末尾にわざわざ書影を掲げたのであった。ちなみに、もうひとり、李穡とともに高麗版に序を書いた僕長寿は、高昌ウイグルの名門貴族の末裔である。至正十九年（1359）、紅巾の乱を避け、父の僕百遼孫に随い一家で高麗に身を寄せた（僕百遼孫は、モンゴル朝廷のケシクで恭愍王と親しく交際していた）。大元ウルスの政治、文化のシステム、ノウハウに詳しく、また多言語能力を買われて外務官僚として活躍し、つぎの朝鮮王朝でも重用された⁷⁾。序文の書影、移録を欠くのが残念である。なお、この高麗版の底本として使用された辰州路総管府重刊本は、恭愍王の寵臣李岳の手を経て知陝州事の姜蕃に伝わったものである（辰州路は桂陽路とともに高麗王

家の所領があった可能性が高い⁸⁾。李穡が「字があまりに大きく帙が重いのを嫌い、あらためて版木に小さい楷書で書かせて刻した（每半板框24.5cm×16.0cm 12行×25字）」ということからすれば、辰州路総管府が重刊のさいに底本として用いたのは、大元ウルス朝廷刊行のいわゆる大字本に違いない。高麗版の版木は、そのご朝鮮王朝でも使用されつづけた⁹⁾。したがって、日本にもその一、二が伝来している可能性がある。

大司農司の設立

さて、至元十年（1273）、とうじ翰林学士だった王磐は、次のように述べた。

聖天子の天下に臨御するに、斯民の生業を使って富み楽しめしめ而して永えに飢寒の憂い無からしめんことを欲し、詔して大司農司を立て、他事を治めず、而して専ら勸課農桑を以って務めと為さしむ。之を行うこと五、六年にして、功效大いに著しく、民間の墾闢、種芸の業、増すること前の数倍なり。農司の諸公は、また夫れ田里の人の能く勤身従事すると雖も、しかるに播殖の宜、蚕繰の節、或いは未だ其の術を得ざれば、則ち力勞して功寡なく、約^{すく}たるを獲て豊かならざるを慮れり。是に於いて古今の所有農家の書を徧く求め、披閱参考し、其の繁重^{けず}を刪り、其の切を摭^{ひろ}い、纂して一書と成し、目して『農桑輯要』と曰う。凡そ七卷。鏤して版本と為し、進呈し畢り、將に以って天下に頒布せんとするに、予に属して其の卷首に題せしむ。

この記述にしたがえば、大司農司の設立は、至元十年よりすくなくとも六年以上前に遡らなければならない。だが、『元史』の「本紀」、「百官志」をはじめ、『燕石集』巻十二「司農司題名記」等、いずれも正式な成立は至元七年（1270）とする。ために、『四庫全書総目提要』、『新元史』をはじめ、その矛盾の解決に苦慮してきた。

世祖クビライは、カアン^{イェゲオ}の座についてわずか二ヶ月あまり、中統元年（1260）年五月十九日の「中統建元の詔」に付された条画の中で、はやくも各路の宣撫司に命じて農事に通曉する人員を選ばせ随処の勸農官に充て、田畑の開墾、桑麻の生産量の増大を目指すことをうたった¹⁰⁾。二八日には、十路宣撫司の設立とそのメンバーが公表された¹¹⁾。また、秋に弟アリク・ブカー派のアラムダル、クンドゥカイとの会戦に勝利するや¹²⁾、「大幹魯朶^{イェケオ}の人が来た也。其の余の軍人^と与民戸^{たち}毎も亦、多く投拜^{たぞ}した也。省論して軍民は業に安んじ農に務め^よ者」という聖旨^{ジャルリク}を発令、カアン^{イェケオ}の仁民愛物の心を確認させるべく、榜文を出した。軍馬が穀物、桑、果樹を食い荒らしたり、踏みしだかないよう、農民から酒、食糧、物を奪わないよう、旅客の通行の邪魔をしないよう、厳しく禁治したのであった¹³⁾（いご、農耕地の保護、牧地との区別——ときには柵をたてて分割する一種のエンクロージャーは、モンゴル朝廷がとくに気をつかう事項でありつづける）。翌年の中統二年五月には、翰林国史院の王惲の手になる歴代の水利、宮屯田、漕運、貨幣、租庸調等の法、漢唐以来の宮殿制度等を纏めた報告書が完成した。これは、都堂の鈞旨を奉じて編

纂されたもので、そのご出版にいったという¹⁴⁾。八月には、それぞれ十路宣撫司のうち燕京路、真定路、東平路の宣撫使であったムスリムのサイイド、ウイグル貴族のブルカヤ（京兆等路宣撫使廉希憲の父）と姚枢（関中で屯田経営、桑の栽培等に敏腕を発揮、実績があった）に大司農の職名を授けたうえで——同年十月に廃止される十路宣撫司は、勸農桑や、保举、弾劾など、のちの御史台系統の職務をも帯びており、ブルカヤはこのとき御史大夫の肩書きも授けられる¹⁵⁾——勸農司を設立した¹⁶⁾。陳遼、崔斌、成仲寛、粘合従中、李士勉、陳天錫、陳膺武、マングタイ忙古帯の八名がそれぞれ濱棣、平陽、済南、河東、邢洺、河南、東平、涿州に勸農使として派遣された¹⁷⁾。姚枢は、こんにち全真教の祖庭永楽宮においてひととき高く聳え立ちとびきりの美しさを見せる中統三年九月立石の「大朝重建大純陽万寿宮之碑」の篆額、書丹を担当しているが、自らの名に冠する肩書きはまさに“大司農”の三文字である¹⁸⁾。かれは、劉秉忠、史天沢とともにクビライのブレインとして、大元ウルスという新国家づくりの企画、立案に携わり、曲阜の孔、顔、孟三氏の儒学教育、礼楽の整備、官の俸給制、条格の講定等も行っている。先述の王惲もかれがとりたてた。

おそらく王惲は、この姚枢が大司農となり勸農司が設置された中統二年から起算しているものであり、至元四年（1267）頃になると、その成果が顕著に窺えるようになっていたということだろう。かれ自身、かつて益都済南等路宣撫副使であったうえ、中統三年初めの李璫の反乱の際には、いち早く脱出し、姚枢、クビライに報告、献策している。したがって、十路宣撫司——メンバーのほとんどが『国朝名臣事略』に取り上げられ、かれらの勸農の行跡が記されていることは注目されてよいだろう——から勸農司への移行の事情、意味は、非常によく理解していたにちがいない。

クビライは、勸農司の設立後まもない中統三年四月十九日に、中書省、宣慰司、諸路のダルガ、管民官に対し命令文を発令、人々に田土の開墾、桑棗の栽培に当たらせるよう勧誘し、むやみに不急の労役に借り出して農作業を妨げないように念を押した¹⁹⁾。この時期、河南では、おもに南宋戦のための屯田で使用する目的であったが、農器をなんと二十万件も鋳造している²⁰⁾。

そのご、アリク・ブケが投降し、名実ともに唯一のカアンとなると、中統五年、クビライは元号を『周易』の“至哉坤元”からとった“至元”に改め、姚枢の講定した官制の条格²¹⁾を發布する。同年、『周礼』の「考工記」のノルムに則した新しい国都、“大都”の建設を宣言、いっけん中華風の装いをした国家づくりがはじまる。のち至元八年に宣言される“大元”イェケモンゴルウルス大蒙古国という国号も、元号と対になる『周易』の“大哉乾元”からとられていることからすれば、この時点ですでに劉秉忠、姚枢の頭の中には完成プランができあがっており、地ならしをしながら順々に実施されていったとみるべきだろう。

まず、至元二年、姚枢が李璫の乱をきっかけに史天沢とともに強制的に進めていた東平の嚴

忠濟、順天の張柔をはじめとする漢人軍閥の解体、転封と戸籍の再編成が終了、投下領を前提とした行政区画がほぼ確定した²²⁾。各路のダルガにモンゴル、総管に漢人、同知にムスリムを任命するシステムや遷転の法も整備、翌年から施行された²³⁾。それにともない、黄河の南北、西川、山東、四川等で屯田が本格的にはじまった²⁴⁾。

至元五年七月には、中書省、樞密院、制国用使司（のちの尚書省）をはじめとする内外の官庁のチェック機関として御史台が、翌至元六年はじめにはその附属機関たる提刑按察司が四道に分けて設置された。提刑按察司の職責には、各地の長官たちの（解由状に記載が義務付けられてもいる）勸課農桑の実績調査も含まれていた²⁵⁾。さらに八月、諸路に「勸課農桑」の詔を下し、中書省、尚書省に命じて農桑に関する注意事項を収集、簡条書きにさせ、提刑按察司と各州、県の官とともに各地の風土を斟酌しながら取捨選択して、別に頒行した²⁶⁾。この年、飢饉の年の対応策として穀物の値段を調整して売買する、あるいは貯蔵しておく常平倉、義倉の法も立てられた²⁷⁾。

そして、至元七年、アフマド率いる尚書省設立と連動して、一ヶ月後の二月、司農司を特設する詔が出され、参知政事の張文謙が司農卿に任じられたのである²⁸⁾。張文謙は、かつて十路宣撫司の一つ大名・彰徳・邢・洺・衛輝・懷孟等六路の宣撫使をつとめ、また至元元年から二年にかけて、西夏中興の行中書省にて部下の郭守敬、董文用とともに唐来、漢延の二渠の整備を行い、十万頃 of 田の灌漑という成果をあげていた²⁹⁾。司農少卿にはモンケ時代、クビライの分封地であった懷孟地区を中心に河南、陝西一帯の経営に尽力してきた譚澄が任じられた³⁰⁾。司農司の下には、附設機関として中都山北東西道、河北河南道、河東陝西道、山東東西道の四道巡行勸農司を置き、それぞれ正使と副使を貼り付けた。正使には金牌、副使には銀牌が授けられた。これは、明らかに御史台と四道提刑按察司の構造を模したものであり、また勸農と按察を対にした派遣は、つとに姚枢が東平路宣撫使をつとめたときに試みてもいた³¹⁾。もっとも重要な山東道巡行勸農使には、張文謙の右腕であった董文用が任じられ、六年間まったく異動しなかった³²⁾。副使は、『農桑輯要』の序文を書いた孟祺がつとめた。なお、司農司の設立は、一説に中書省のボロトと張文謙に高天錫が進言した結果、ともいわれる。高天錫はクビライのビチクチ、かつ（父高宣の軍功によって認められた世襲の）鷹坊都総管で、燕京諸路奥魯総管、^{アウルック}ついで提刑按察副使も兼任していた。この進言によって、かれは中都山北道巡行勸農使兼司農丞、ついで巡行勸農使兼司農少卿となった³³⁾。

この詔と呼応して、張文謙等が整理した「農桑之制」十四条も発令された。『通制条格』巻十六「田令・農桑」、『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《立社》【勸農業立事理】に見えている。近隣の村の五十家を一社として一種の互助会制を敷き、社長に風紀を取り締まり、儒学の初等教育、義倉、戸計等を徹底管理させるほか、時宜に照らした各種農作物の栽培、榆、柳の植樹、灌漑用水の整備、池の掘削と魚や鴨の養殖、蓮根等の栽培、蝗害の防止、早期駆除などの指導

にあたらせた。とくに桑、棗の株の植え付けが推奨され、毎年、社ごとに植えた合計数を所在の役所に報告することが義務づけられた。また、それとは別に、各路で「区田の法」も版木に刻し、一枚刷り、あるいは小冊子にして、各社にいきわたるよう大量に配布した。『救荒活民類要』「元制・農桑」に載る【伊尹区田之図】、【区田之法】、カラ・ホトから出土した F 116: W 534, F 116: W 115 がおそらくそれであろう³⁴⁾。

ところが、この司農司は、設立からわずか九ヶ月余りの十二月一日、大司農司に改められる。大司農、卿、小卿、丞、農正の五名、その下に都事、知事が置かれた³⁵⁾。そして、トップの大司農（正二品）には、張文謙ではなく、クビライのための指名を受け、ドルベン族の出身で、この年の八月に御史中丞（従三品）となったばかりのボロトが任じられた。ボロトの祖父ブルキは、チンギス・カンのケシクの一員——バウルチ（食事係）を務め、ボルテのオールドにいた御家人で、ボロト自身もまた、クビライのバウルチであった³⁶⁾。クビライの命をうけ、十路宣撫使のひとり張徳輝のもとで学んだこともある³⁷⁾。この抜擢に、ジャライル国王家のアントム中書右丞相が、御史台との掛け持ちは前例がないとして難色を示したが（じっさいには、名目だけとはいえ、ブルカヤの前例がある）、司農の業務は細事ではないとして、退けられた³⁸⁾。ありとあらゆる農産物の生産高、租税を把握するだけに、御史台、提刑按察司と連携し、中書省戸部、尚書省のチェック機関となることが当初から想定されていたのだろう。ちなみにボロトは、至元六年以来、劉秉忠、王磐等とともに朝儀の制定にも与っており、至元八年の侍儀司の設立にともなってさらに領侍儀司事も兼ねることになる³⁹⁾。御史台（従二品）の設立当初に中書右丞相タガチャル（父はモンケのときの千夫長）が、江南諸道行御史台の設立当初にジャライル家のセンウがそれぞれ長官として据えられたように、大司農司の設立にも、相当気合がはいっていた⁴⁰⁾。ただし、設立から三年の試行期間が設定されており、結果次第で継続が認められることになっていた⁴¹⁾。十二月二六日には、都水監も大司農司の所轄に帰せられた。

大司農司の附属機関としてはさらに籍田署があり、ここでは、設立当初から春秋それぞれ仲月の戌の日に社稷を、立春後の丑の日に風師、立夏後の申の日に雨師、雷師を祭る儀礼を担当した⁴²⁾。至元九年二月からは、先農、先蚕の祭祀も開始され、各路でもそれに準じて小型の祭祀を執り行うべく通達が出された⁴³⁾。張文謙が音頭をとったとされるが⁴⁴⁾、領侍儀司事であったボロトも大きく与ったにちがいない（なんといっても、翌至元十年に、孔子を祭る釈奠の服色についてみずから意見書を提出しているくらいなのだから）⁴⁵⁾。

また、大司農司の指導によって、大都から、各路、州、県まで、城郭の周辺、河川、運河の兩岸、駅伝用の舗道の両側、旅籠、本陣の周囲には、榆や柳、槐の木が植えられ、大々的かつ組織的な緑地化が進められた。『東方見聞録』のインフォーマントが目当たりにし、感激した公道沿いの並木である。それらの樹木は、交通の目印としてだけでなく、堤防や橋の補修、建設の資材としても使用が当て込まれていたが、ひとびとが自発的に植えた分については各自

が焚きつけ等に用いることもとめられていた⁴⁶⁾。

組織的といえば、農地開発の前提となる水利事業もそうである。巡行勸農官は、開発が必要な地域について、現地の調査報告、絵図、地図および人件費をはじめとする見積書を大司農司に提出し、枢密院をも掌握するボロト、張文謙等が中書省と審査、合議する。その結果、申請の許可がおりると、巡行勸農官は、農閑期に各路の正官とともに工事の監督にあたった⁴⁷⁾。

なお、あえてつけくわえておこなうならば、少なくとも成宗テムルの大徳八年（1304）まで、籍田署はともかく大司農司なる建物は存在しない。一般に官庁の設立といえば、まずハコモノが用意されてそこに人が入るように錯覚しがちである。大元ウルスの各主要官庁は、表面上は、中華風の官僚機構に見える。しかし、じっさいは、トップに、すべてカアン（ケシク）から、自前の軍事力をもつモンゴルの名門貴族がかけもちで出向しており、重要事項はかれらがカアンに報告しモンゴル伝統の御前会議で決定されていた（そのようすの一端は、モンゴル語直訳体の資料のなかに窺うことができる）。モンゴルのシステムにおいては、極論すれば、事務室と文書庫さえあればよいので、じじつ大司農司も吏部に間借りしていた。とくにそれで不便があったわけではなく、のちの建設の理由も“主要官庁なのに格好悪い”というだけのことであった⁴⁸⁾。

『農桑輯要』の編纂

至元十年八月、とうじ承事郎（正七品）で、太常博士応奉翰林文字と山東東西道巡行勸農副使を兼官していた孟祺⁴⁹⁾は、『農桑輯要』の編纂の経緯を次のように述べる。

主上の龍飛したるに、民事に精を励まし、大司農司は寔に古の九扈氏の職に居り。越すこと至元九年の冬、具奏したるに「以爲；農蚕は生民の日用なるに、苟しくも事の古を師とせず、民の簡惰に習えば、將に以て其の生業を厚くすること無からんとす」と。旨有り「耕蚕種蒔の説の方冊に載る在る者は、其れ択びて以て民に授けよ」と。是に於いて、諸書を哀集し、歴して銓次を加う。遠くは神農、后稷の言を推うに、年を歴ること既に久しく、粹にして完文の考うる可き無く、独り後魏の賈思勰の撰する所の『齊民要術』の一書のみ、前代諸家の善を備え集め、農書に即きて之を論ずれば、“翠毛を採り而して象齒の戾を抜く”と謂う可し矣。遂に之を銓次の首に列す。間に未だ備わらざるところ有るは、近代の有る所の書を取り以て之を補う、曰く『図経』、曰く『四時類要』、曰く『博聞録』、曰く『歳時広記』、曰く『蚕経』。夫れ今代の書の若きは則ち東平の脩氏の『務本新書』、左轄たる姚公の『種蒔直説』、『土農必用』、農正たる韓公の『韓氏直説』、『桑蚕直説』有り。其の次第の先後は、各、年代歳月を以て差と爲す。是乎り外る者、布衣郷里の士の『農桑要旨』、『齊魯野語』、陳道弘の録する所の若きは、片言隻説と雖も事に於いて補い有る者は、亦、之を分注の下に附し、之を終うるに大司の統添の法を以てし、合わせて一書と爲し、目して『農桑輯要』と曰う。其の「輯要」云と曰う者、繁を

芟^かり簡に就き、区して以て別と為し、覧者の検閲に於いて易きを庶^{こいねがのみ}う尔。必ず其の全文を考えんと欲すれば則ち本書に具載有り。

大司農司がクビライに農書の編纂の許可をもとめたのは至元九年の冬。まもなく終了する三年間の試行期間の成果が問われているときであった。ほぼ同じ頃、十一月には、大司農ボロトが太保劉秉忠とともに、秘書監（従三品）創設の許しも得て、至元十年正月十三日に正式に設立のはこびとなった（ほぼ同時期、ムスリムのイーサーが設立した京師の医薬院も、広恵司に改められた）。秘書監の職責は、“図史を儲し、儀度を正し、経籍を頒ず” ことにある。至元十年閏六月以降、陰陽学や農耕と深くかかわる天文、暦を扱う回回^{ムスリム}と漢児^{モタイ}の司天台もここに所属した⁵⁰⁾。現在でいえば科学技術庁のような機関で、東西の膨大な書籍を収蔵する図書館ももっていた（三年後の南宋接收のさい、パヤンに臨安宮中の図書、祭器、楽器を確保、大都の秘書監に輸送を命じられるのが、ほかならぬ孟祺である）。大司農司の継続は、三月に正式に認められ、ついでにタマ軍も現地の社にそれぞれ編入され、水利事業の労役や義倉への協力が義務付けられた⁵¹⁾。『農桑輯要』はその記念出版物となった⁵²⁾。

そもそも、クビライは、この至元九年の冬の頭の十月に、三男のマンガラを安西王として京兆に分封、六盤山に軍を駐屯させ、そのうえで翌十年三月、大都広寒殿にてチャグイを皇后、次男の燕王チンキムを皇太子として冊立する中国風の式典を執り行ったのであった⁵³⁾。政体整備の総仕上げとあってよかった。また、フレグ・ウルスのイスマーイール達がつくったマンジャーニク（回回砲）の投入により、樊城、襄陽が至元十年正月から二月にかけて降伏し、南宋接收の見通しもたっていた。金と南宋の一〇〇年間に亘る抗争によって荒野となっていた淮河の南北両側の広大な地域の復興のためにも、『農桑輯要』の編纂は役立つはずであった⁵⁴⁾。

さて、『農桑輯要』は、わずか半年ほどの間に編纂されたわけだが、編修にあたっては、拓跋の後魏の時代（532-550）に賈思勰が著した『齊民要術』十卷九十二篇を土台に据え、この書の記述の不足を他書で補うという形がとられた。書籍の引用にあたっては、成立年代順に厳密に配列された。

『図経』は、ただ一箇所、巻二「苧麻」に引かれているが、これは『本草図経』の「苧根」の記述から採ったものである。『本草図経』は、唐の顕慶年間（656-660）の稀少な抄本に依拠して、北宋の嘉祐三～六年（1058-1061）に林億、蘇頌等が校訂し、国家出版された。政和六年（1116）には、これを増補した唐慎微『証類本草』も頒行された。『証類本草』は、『本草衍義』のデータを加えて、貞祐二年（1214）嵩州福昌県の書籍舗の夏氏が刊行したテキスト（杏雨書屋蔵）、オグル・ガイミシュ（モンゴル第三代皇帝定宗グユクのカトン）称制の一年目（1249）、平陽の張存恵によって刊行されたテキスト（劉祁、麻革が序文を書いている）等があったから、大司農司のメンバーが閲覧することは、決して困難ではなかっただろう。

『農桑輯要』において『四時類要』として引用されている文章は、いずれも唐の韓謬の『四

時纂要』とほぼ一致する⁵⁵⁾。北周の世宗の顯徳年間（954－959）、実行はされなかったが、竇儼がすでに『斉民要術』、『四時纂要』、韋行規『保生月録』の必要部分を抜粋して一卷とし、諸州に配布することを願い出ている。また北宋は真宗の天禧四年（1020）八月に、利州転運の李ムがこの二書の頒行を皇帝に願いでて、崇文院で校勘、上梓のはこびとなり、諸路の勸農司に頒布された⁵⁶⁾。『金史』を信ずるならば、大（女真）金^{アムバン ジョシエン アルチュングルン}国は、モンゴルの侵攻の激しくなった宣宗の興定六年／元光元年（1222）にいたってようやく司農司を設立するのだが（それ以前は勸農使司）、このときやはり『斉民要術』が参照されている⁵⁷⁾。大司農司の選書は、華北を版図とした歴代王朝の伝統を承けたものといえる。

いっぽう、『博聞録』は、南宋末期、建陽の陳元靚がものした類書（一種の百科事典）で、大元ウルス治下さかんに最新版が出された『事林広記』の前身である。『農桑輯要』に引用される『博聞録』の記事のほとんどは、『事林広記』の中でもっとも古いかたちをとどめる和刻本の庚集巻四「農桑門」、辛集「獸医集驗」と一致する⁵⁸⁾。

『歳時広記』も陳元靚の著作で、朱鑑、劉純の序文から『博聞録』より少し後——1220年代の成立であることが知られるが、宋・元刊本は現存せず、『十万卷楼叢書』の四十二巻のテキストが伝わる。書中に『博聞録』を引用するなど、後世にかなり改訂が施された可能性があるが、少なくとも『農桑輯要』巻四「浴連」の記事は、巻十一「上元中・変蚕種」、巻三九「臘日・浴蚕種」とほぼ一致する。巻五「諸果」も、現行のテキストでは欠落している巻六「元旦中」に含まれていた可能性がある。

至元十三年（1276）正月の正式な南宋接收より前に、大司農司は、すでにこの二書を入手していたのである（通念とはことなっており、遼・金以来、華北と江南は、国境線を越え、ときには海・河川ルート、高麗、四川、雲南を経由して人・モノ・情報がそうとう自由に流通していた）。

なお、『蚕経』の成立は、陳元靚の著作よりおそいはずなので、とうぜん『旧唐書』巻四七にみえる『蚕経』一卷でもなければ、至道元年（995）に李元真が献上したという『養蚕経』でもない。王楙の『農書』（国立公文書館蔵嘉靖九年山東布政使司重刊本）が引用する『淮南王蚕経』三巻でもない。金末の著作ではなかろうか。王楙が『秋澗先生大全文集』巻六二「勸農文」において言及する『蚕書』の可能性もある⁵⁹⁾。

以上の書は“近代”という区分で一括りにされていたが、それらと対比される“今代”の書とは、大^{イェケ}モンゴル^{ウルス}国の太宗オゴデイが1234年に金を滅ぼして以降、至元十年までの書物ということである。じっさいに『農桑輯要』の引用順をチェックしてみると、孟祺が述べるとおり『務本新書』→『種蒔直説』→『土農必用』→『韓氏直説』→『桑蚕直説』となる。

『務本新書』の著者、東平の脩氏とは、モンゴル治下、沅州路の判をつとめた脩謙の父、山東益都の儒学教授だった脩思善の祖父——おそらくは『秋澗先生大全文集』巻一〇〇「玉堂嘉話八」および『国朝文類』巻四五に収録される「辯遼宋金正統」の撰者であるかの脩端だろ

う。『農桑輯要』卷二「播種」《区田》に引く『務本新書』には、“壬辰，戊戌之際，但能区種三五畝者，皆免飢殍”とあり、『務本新書』がオゴデイの十年（1238）以降の成立であることは間違いない。そして「辯遼宋金正統」は，1234年の東平における諸公の議論という設定である。至正二一年（1361），モンゴル朝廷の文官として順調にキャリアを積んでいた貢師泰は，江南行台から福建に派遣されてきた令史の脩徳（あざなは敬宗）に，氏名と籍貫を聞いて即座に“もしや，あの金末の進士の脩君の子孫のひとりか”と聞いている⁶⁰。『国朝文類』が科学の必読本として読まれていたとうじにあっては，金末の進士であった東平の脩氏といえば自明のことであり，ただ一人，厳実のところには脩端しか指さない。さらに，『千頃堂書目』巻十二には，“脩廷益の『務本直言』三卷”が記録されている。この書は，王禎『農書』の「農桑通訣五」【種植篇】，「穀譜一」「大小麥」，「豌豆」，「農器図譜十六」【蚕繰門】に引用されている。そのうち「豌豆」の引用部分は『農桑輯要』卷二「豌豆」の，「大小麥」の引用部分は『農桑輯要』卷三「栽桑・種楳」の『務本新書』として引用されている部分とほぼ一致——むしろ詳しい。にもかかわらず王禎が『務本新書』と『務本直言』を別個の書として扱っていること，廷益は脩謙^{あざな}の字としてこそふさわしいという点を考えれば，後者は前者の増改訂本ではあるまいか。ちなみに，『農書』は，完成後まもない大徳八年（1304），江西儒学提挙司および江西湖東道肅政廉訪司の指揮のもと，龍興路の儒学において刊行された。とうじ江西等处儒学副提挙であった祝静得（静得は号，名と字は不明）の牒呈によれば，“坊肆の刊する所に，旧くは『斉民要術』，『務本輯要』等の書有り”という。『務本新書』は，『斉民要術』について引用される回数が多く，引用箇所をみると巻一から巻六まで，つまり穀物，野菜，果樹，菓草，栽桑など広範な内容をもっていたことがわかるが，なかでも養蚕の記述が詳しかった。

『種蒔直説』，『土農必用』の著者としてあげられる左轄姚公は，いうまでもなく姚枢のことである。姚枢は，オゴデイの五年（1233）に開始された国学で，楊惟中とともにモンゴルの子弟の教育に携わり，七年の対南宋戦の際には，特命をうけて儒，道，釈，医，卜の人材発掘のためにクチュ（オゴデイの息子）の軍に付き従った。このとき，趙復を燕京に連れ帰り，程子，朱子の書による経学教育が開始されたことはよく知られている。十三年（1241）には，オゴデイから金符を賜った。河南の輝州に家を構え，雲門の地区に糞田数百畝を開墾，灌漑用に水車を二つ作ったという。『種蒔直説』は，『農桑輯要』卷二「耕地」，「種穀」にそれぞれ一箇所引用され，最新式の鋤が紹介されている。この時期の経験にもとづく著作かもしれない。また，とうじ入手が困難だった朱子の『小学』，『論語或問』，『孟子或問』，『家礼』をいち早く自ら出版したほか，楊惟中等に『四書集註』，『詩集伝』，『易程伝』，『書蔡伝』，『春秋胡伝』を刊行させ，さらに弟子の楊古に沈括の活字印刷術を教えて小学書，『近思録』，『東萊經史論説』などの書を印刷，頒布した。許衡もその恩恵にあずかって，朱子学の普及に邁進しはじめるのである。そうした評判を耳にしたクビライは，姚枢を自身のブレインとして迎え，政治，経済，

文化など多岐に渉るさまざまな献策を実行させていく。憲宗モンケの元年（1253）、対南宋戦に備え、汴梁路の西にはじめて屯田経略司を置いたのもかれの発案である⁶¹⁾。そして翌年には、関中の勸農使に任じられ、桑の栽培に乗りだす（『東方見聞録』でも河中、京兆の生糸の生産が特筆される）。

『士農必用』は、もっぱら卷三「栽桑」、卷四「養蚕」に引用され、唯一の例外に見える卷二「大小麥」の引用もほんらいは蚕について述べたものだった。したがって、まさにこの前後に編纂されたとみてよい。二書ともに、経学のテキストと同様、版木に刻して、四方に配布したものと見られる。『士農必用』は、引用回数では『務本新書』の後塵を拝するが、字数では『斉民要術』に次ぐ。姚枢が徹底した実学主義であったことは、のちの南宋接收のさい、王磐とともに、使える学生だけ選んで大都に留め、あとは全部家に帰したというエピソードからも窺えるが⁶²⁾、じっさいにこうした実用の著作があったことは、甥の姚燧の手になる神道碑をはじめ、まったく言及しておらず、じゅうらい知られていなかった。『農桑輯要』が姚枢の著作を中心に編集されたとなれば、至元七年の大司農司の設立自体がちがった様相を呈してくる。ボロトが名目上トップではあったが、姚枢がいまだ隠然たる力をもちつづけており、かれのブランドおりに華北経営は進んでいたのである。

そして『韓氏直説』、『桑蚕直説』もまた現役の大司農司の農正の著作であった。この韓公とは、東平は盧龍の韓文献の可能性が高い。元好問の友人でかれの文集に何箇所か名を留めるほか、『還山遺稿』卷上「東遊記」、「闕里題名」をみると、モンケの二年（1254）三月には、東平行台の嚴忠済の庇護下に楊奐、劉詡とともに曲阜孔子廟を訪れている。そのご中統元年（1260）六月に、劉郁、胡祇適等華北各地の名士とクビライのもとへ招聘された。『牆東類稿』十三「杜夫人墓誌銘」によれば、女真族の孫澤の継室である杜氏の母韓氏が大司農某の子という。おそらくこの孫澤の義理の祖父が、著者であろう。なお、高天錫のように大司農の設立当初、巡行勸農の職を兼官した事例もあるので、至元九年から十一年にかけて大司農司の筭付を奉じて陝西涇水の使水法を研究した巡行勸農副使の韓某も同一人物の可能性もある⁶³⁾。『桑蚕直説』はもちろん、『農桑輯要』の引用箇所を見れば、『韓氏直説』も「栽桑」「養蚕」に重点を置いた書であったことが推察されるが、耕地、種まきの用具、牛の飼育についても言及がある。

なお、「直説」とは平易に解説することで、じっさいいづれの書物もきわめて簡潔な漢文で書かれている。ただし、同時期に編纂された許衡の『直説大学要略』が、口語の語彙をもって書かれていることからすれば、『種蒔直説』、『韓氏直説』、『桑蚕直説』もほんらい同様の文体で書かれており、『農桑輯要』への収録の段階で『斉民要術』にあわせて統一された可能性がある（ほかに、王禎が『農書』「農器図譜十六」【蚕繰門】でしばしば引用する『農桑直説』——この書が華北で成立したことは間違いない——もある）。少なくとも姚枢の著作については、モンゴル語の

ヴァージョンもあっただろう。

ともあれ、大司農司の諸公は、古今のさまざまな農書から慎重に記事を選定し、各条項の記述がいずれも要を得て重複、無駄がないように、かつ詳細、豊富な内容を提供すべく編纂したのであった。技術者にありがちな、惜しむということは、かけらもなかった。実用に徹し、迷信的なものは極力採用を避けた。読者がふたたび各原書にあたる必要はない、と豪語するほどの出来栄であった。『務本新書』以下の書籍がこんにち単行本では伝わらない原因のひとつであろう。

また、『農桑輯要』全体の三分の一を占め、こんにちもっとも高い評価を受けている卷三、四に関しては、より念をいれて現地の見聞にもとづく『農桑要旨』、『齊魯野語』、陳道弘（勸農官のひとりだろうが、書中、陳志弘と記す箇所もあり全真教の道士との推測もある）の記録、大司農司のメンバーの知識を割註として附し、詳細な記述を心がけた⁶⁴⁾。『農桑要旨』は、大徳六年（1302）の段階でも、山東の高唐州の知事であった吉士安が栽桑、養蚕のテキストとして使用している⁶⁵⁾。とうじ山東では、絹糸の生産が極めて盛んに奨励されていた⁶⁶⁾。たとえば、李壇の乱のあと濱州の知事となった姜晟は、中書省に上申して断事官に投下の牧地と民田を厳密に区分してもらったうえで、農民を指導して見渡すかぎりに桑を植えさせた。その桑田はのち「太守桑」と呼ばれたという⁶⁷⁾。益都楽安県の豪農の家に生まれた綦公直は、至元五年、益都の勸農官として、栽桑、養蚕のマニュアルを作製して指導にあたり、数年で倍の利益を得ることができるようになった（ちなみに、かれはそこ数々の軍功をたて、ビシュバリクの都元帥にまで上りつめる⁶⁸⁾）。また、長清県の尹となった高伯温は、桑を十七万余株も植えさせた⁶⁹⁾。そもそも、脩端、姚枢、韓文献、孟祺、王磐は、みな東平と深い関わりをもち、みずからの目で山東の栽桑、養蚕の実態を確かめた人々であった。

ところで、『農桑輯要』卷二のあとには、附録として孟祺の「論九穀風土時月及苧麻木綿」があり、その記述から卷二「苧麻」、「木綿」の項に【新添】として収録される記事もかれの撰であったことがわかる。ほかに、【新添】の記事としては、卷五「西瓜」、「蘿蔔」、「菠薐」、「蒿苳」、「同蒿」、「人苳」、「苕蓬」、「銀杏」、「橙」、「橘」、「榧子」、卷六「（松）」、「漆」、「（皂莢）」、「棟」、「椿」、「葦」、「蒲」、「梔子」、「枸杞」、「甘蔗」、「薏苡」、「藤花」、「薄荷」、卷七「蜜蜂」がある。（ ）を附したものの以外はすべて、『齊民要術』をはじめほかの農書からの引用がない、大司農司のメンバーが新たに補った項目で、まったく独自の記述である。これら【新添】の記事こそ、孟祺が序文にいうところの“大司の統添の法”にほかならない。

じゅうらい、至元十年はあくまで初稿完成の年であって刊行はなされず、南宋接收後の至元二三年に新しいデータを加えて暢師文が改訂したのだと、考えられていた。『元史』卷十四「世祖本紀」が至元二三年に『農桑輯要』が頒行されたことを伝えており、それと呼応するかのよう、『元史』卷一七〇「暢師文伝」が“二十三年、監察御史に拝せられ、糾劾するに権

貴を避けて、所纂する所の『農桑輯要』の書を上す。二十四年、陝西漢中道巡行勸農副使に遷され、義倉を置き、民に種芸の法を教う”と述べていたからである。しかし、じっさいには至元十年の時点で、すでに『農桑輯要』はこんにち見られる状態に完成していたのである。そこで、ふりかえて「暢師文伝」がもとづいたと考えられる許有壬の『至正集』巻四九「暢公神道碑銘」を見てみると、“遂に監察御史に拝せられ、権貴を糾劾し、憲綱は肅然とす。纂する所の農書を上し、陝西漢中道巡行勸農副使に遷され、義倉を置き、栽植を教え、荒田を闢き、農事以て興る”としか述べていないのであった⁷⁰⁾。『元史』の編纂官が勝手に解釈を加えて辻褄を合わせていたのである。

王磐が序文ではっきり述べているように、『農桑輯要』は、至元十年のうちに、おそらくとうじボロトがおさえる大司農司、侍儀司の管轄下にあった秘書監の興文署において版本に刻され⁷¹⁾、勸農の職務を負う提刑按察司等の官庁に頒布された。翌至元十一年三月には、高麗国王の王禎に「勸課農桑の詔」を出しているから、あるいは、できたばかりの『農桑輯要』も賜与されたかもしれない⁷²⁾。普及版もさほど時をおかずして平陽などで陸續と作製されただろう。

『元典章』巻二三「戸部九・農桑」《勸課》【種治農桑法度】によれば、南宋接收から三年たった至元十六年三月、江南行台は、じゅうらいどおりの農業に加え、とくに栽桑を奨励するために、遍く命令書を発布した。命令書の後ろには、“社の長を督勸して農民を勸諭し、時に趁じて栽種する”よう、淮西江北道提刑按察司が“諸書の内於採択し到った樹桑の良法”がそのまま書き連ねられていた。【種桑】【地桑】【移栽】について、『齊民要術』、『務本新書』、『士農必用』の記事が抜粋されていたが、これらは、あきらかに『農桑輯要』巻三の「種榘」、「地桑」・「庄条」、「移栽」から適当に抄録したものであった（『汜勝之書』は『齊民要術』からの孫引き、「地桑」の『齊民要術』の引用は『士農必用』の間違い、『仕民必用』は『士農必用』の誤刻）。

大司農司の浮沈

至元十二年四月、大司農、領侍儀司事ボロトは、兼官する御史台において御史中丞（従三品）からトップの御史大夫（従二品）に昇進し、スライド式に張文謙も司農卿兼御史中丞になった。それと同時に、巡行勸農司が廃止され、そのメンバーを、管轄面積の広大さに比して官員数の不足が叫ばれていた七道の提刑按察司に移行、吸収して、巡行のさい按察と勸農の職責を両方負わせたのである。これによって按察司の官のじゅうらいの肩書きの下には名実ともに“兼勸農事”がつくことになった⁷³⁾。提刑按察司の職務にはもともと勸農が含まれており、ふたつの官庁の職責は重複していたから、無駄を省き、管轄地を満遍なく巡行できるようにしたわけである⁷⁴⁾。ただし、各官庁の書類の監査、弾劾はもちろん御史台に報告するが、農桑、水利、義倉等に関連すること、一切の数字はこれまでどおり大司農司に報告することになっていた。この処置は、中書省がおりから進めつつあった官庁の合併政策の一環であった。

ところが、九月にアルラト部族ボオルチュの後裔で同じバウルチのウルルク・ノヤンことウズ・テムルも御史大夫となり⁷⁵⁾、翌至元十三年（1276）十二月には、中書省と御史台の折衝の中で提刑按察司そのものがいったん廃止に追い込まれる⁷⁶⁾。張文謙等の強固な反対によって一ヶ月後の至元十四年正月に再び設置されたが、張文謙は、姚枢のあとをうけ昭文館大学士および領太史院事となり、『授時曆』編纂プロジェクトの統括にあたることになる⁷⁷⁾。ボロトは、とうじ濃厚になりつつあったシリギの反乱の動きに対する策として、そして御史台に二名の大夫は不要という姚天福の内部告発もあって枢密副使、兼宣徽使、領侍儀司事へと——侍儀司も太常寺に合併されたが——異動する⁷⁸⁾。ここでも軍官、軍人に関する諸制度は、とりあえず、かれによって整備される。しかし、拔擢をうけたとはいえ、結果的に御史台からはじきだされた形となったふたりにとって、御史台よりランクは上だが⁷⁹⁾、下部機関の勸農司を吸い取られ抜け殻同然の大司農司の肩書きに、もはや魅力はあろうはずもなかった。

トップの二人を失った大司農司は、至元十四年八月の時点ではやくも司農司に格下げになっており⁸⁰⁾、そのご衰退の途をたどる。『元史』の「百官志」は、司農司がこの年に廃止され、籍田署は侍儀司と同じ太常寺の所轄になった、という⁸¹⁾。南宋接收後、御史台は、至元十四年七月に江南行台を設置、提刑按察司の附設も認められたが、それとは対照的に、至元十五年三月、アフマドの息子で参知政事のミール・フーシン、張守智が行省の職務と兼官のかたちで、とりあえず江淮行大司農司事となった。旧南宋以来の営田司は冗官とみなされ、宣慰司に吸収された。江南行台のトップのセンウの建策であったという⁸²⁾。

至元十七年には、後ろ盾であった姚枢が三年間の闘病生活の末に身罷り、クビライ、チンキム父子の確執に揺れる至元十八年の十月二十日、農政院なる機関が登場する。同日、翰林国史院、領会同館、集賢院を合体（トップはサルバン）、秘書監、太史院、司天台を合体（トップは張易）し、蒙古翰林院（トップはトルチャガン）とあわせて三つの官庁を司徒府なる新官庁の統括下に置き、その一番上に翰林学士承旨兼修起居注のハルガスンが座った。根本資料たる『秘書監志』巻一「設司徒府」を見ると、『元史』の編纂官が『実録』をまったく理解せずに「世祖本紀」を編集していることがわかり、農政院の記述も甚だ怪しいが、わずかにのこる断片的な資料をもとに言えば、秩は正二品、官員は六名、少なくとも大都・南陽・真定等处屯田孛蘭奚総管府、枢密院の管轄に属す涿州・霸州・保定・定興等処の屯田、広備・万益等六屯を領したらしい⁸³⁾。枢密院の関与からすれば、トップにはボロトが座った可能性が高い。

司徒府、農政院という、このふたつの組織は、至元十九年三月に起こったアフマド暗殺事件のあと、わずか三ヶ月余りの六月二五日、中書右丞相となり事件の鎮圧、処理にあたったハルガスン自らの申し出で廃止される（至元七年に罷免され名譽職に甘んじていた耶律铸がいきなり中書左丞相に復活するなど、隠微な趣を呈することは否定できない⁸⁴⁾）。ところが、事件のさい、ハルガスンとともに軍を率いて大都に駆けつけたもうひとりの人物が、なんとボロトその人なので

あった⁸⁵⁾。

東西文化の交流

ボロトは、至元二十年（1283）夏四月、クビライの使節として、イエケ・ケシクのケレメチで広恵司の長でもあったイーサーとともにフレグ・ウルスに赴いた。だが、ひとりなぜか帰国しようとはせず、そのままアルグン・カンに仕えることとなった⁸⁶⁾。そして、かれこそが、のちアルグンの息子、ガザン、オルジェイトゥの代に編纂されたラシードゥッディーンの *Jāmi' al-Tavārikh* 『集史』の中国に関わる部分のインフォーマントとなったプーラード・チンサン（ボロト丞相）にほかならない。ラシードゥッディーンの著作集の中には、*Āthār va ahyā* 『遺蹟と開墾』というタイトルの、気象学、水利、灌漑、園芸、農業、牧畜等、多岐の分野にわたる著述があり、桑の栽培、養蚕についても言及している⁸⁷⁾。

じゅうらい、『農桑輯要』の最終的な完成、国家出版、諸路への頒布は、至元二三年六月十日以降のことだと考えられていた。しかし、じっさいには、ボロトは、自らも深くかかわった至元十年刊行の『農桑輯要』の知識—— ことによると現物そのものと姚枢たちの勸農政策のノウハウをひっさげて、フレグ・ウルスに赴いていたのである。

Tansūqnāma-i ilkān dar funūn-i 'ulūm-i Khitā' i 『珍奇の書』⁸⁸⁾ には、ラシードゥッディーンの指揮のもと、イル・カンに捧げるためにペルシア語に翻訳された中国の典籍——『王叔和脈訣』、『銅人』、『御薬院方』、『本草』、『泰和律令』が含まれている。

そのうち『王叔和脈訣』は、近年、羽田亨一によって、李駟（字は子埜）の『晞范子脈訣集解』十二巻にいちおう比定された⁸⁹⁾。この書の三年後の咸淳五年／至元六年（1269）に編纂された李駟『新刊晞范句解八十一難経』八巻（静嘉堂文庫蔵元刊本）⁹⁰⁾の巻頭図の多くが、タンスーク・ナーマのそれと一致しており、ほぼまちがいないのだろう。王惟一『銅人腧穴針灸図経』三巻は、北宋天聖四年（1026）に仁宗の命を受けて編纂、頒行されたもので、翌年にはそれとセットとなる銅を鑄てつくった人体模型および、随時拓本を採れるよう図経を刻んだ碑が開封の医官院と大相国寺に置かれた。こんにち金の大定二六年（1186）に平陽の陳氏が刻した増補本を重刊した『新刊補註銅人腧穴鍼灸図経』五巻（台湾国家図書館蔵元刊本）が知られている。碑と模型はのちオゴデイ時代に王楙によって燕京に運ばれたが傷みが激しかったため、至元二年（1265）、クビライがネパール出身の技師アニガに命じて新調させたという⁹¹⁾。金代に編纂された『御薬院方』は、ドレゲネ（オゴデイのカトン）称制の元年（1242）に平陽で重刊され、さらに至元四年（1267）にいたって、栄禄大夫（従二品）提点太医院事の許国禎等が訂補して『新刊惠民御薬院方』二四巻として刊行した。とうじ翰林直学士で、元好問、姚枢、王盤等と交流のあった女真族の高鳴が序文を書いている⁹²⁾。『本草』と題するテキストは膨大にあり、原書を特定することは困難だが、『図経本草』については、既に紹介したとおりである（クビ

ライの聖旨を受けて、至元二一年に、翰林集賢院のサルバン、許国禎をリーダーとして諸路の医学教授たちが『本草』を増修し、二五年にいちおうの完成をみたというが、頒行された形跡がない⁹³⁾。『泰和律令』二十巻は、『新定勅条』三巻、『六部格式』三十巻、そして『唐律疏義』を踏襲した『泰和律義』三十巻とともに、金の泰和元年(1201)十二月に制定、翌年五月に頒行された⁹⁴⁾。現在、この書は伝わらないが、『文淵閣書目』巻三には、“泰和律令、格式一部九冊”が記録されている。趙州寧晋県の荆祐が貞祐年間(1213-1216)前後に『泰和律義篇』の版木を作製、河朔方面に広く流通していたこともわかっている⁹⁵⁾。至元八年十一月十五日に「泰和律令は不用着^{もちいるな}。休依着^{いぢやく}して行^なう者」という聖旨が出され、姚枢、史天沢等が『大元新律』の制定を目指したが、結局刊行されなかった⁹⁶⁾。

ラシードが選定したこれらの書物のほとんどが至元初期に華北で刊行されていることは、タブリーズのラシード区に居住した中国人学者、情報提供の時期を考えるさい、注意されてよいだろう⁹⁷⁾。

ボロトが去って

ひるがえって、ボロトのフレグ・ウルス出立直前の至元二十年(1283)正月。農政院にかわって、務農司が設立されたが、ランクは一気に三等分下がり従三品となった。官員も二名減らされ、ダルガ一名、務農使一名、同知二名の陣容である。しかし、同年の十一月には、司農寺に改められ、ダルガ一名、司農卿二名、司丞一名が置かれた。その職責は、官田の邸舎、人民を掌ることであったという⁹⁸⁾。この司農寺のダルガとなったのが、テゲ——モンケのとき国師として天下の仏教を統括したティベット仏教僧、カシミールのラマ(ナマ)の甥で、クビライの目にとまり、若年よりバウルチのボロトに預けられ、クトゥダル・ケシクのシャルパチとなった人物であった(許国禎の息子で礼部尚書提点太医院事となる許展——別名コルゴスンとは、クビライによって結びあわされた義兄弟である)⁹⁹⁾。ラシードウッディーンが『集史』に名を書きとどめるテケ・フィンジャンその人でもあり、総制院、尚書省を押さえるサンガと同じくウイグル部族の出身とされる(母と正妻は漢人)。至元十五年二月、籍田署で先農の祭祀を執行したと『元史』に特筆されるモンゴルの子弟とは、おそらくはかれを指す¹⁰⁰⁾。

テゲは、至元二一年の冬、クビライの命をうけ、まず漣海一帯の宣徽院所轄の荒地、襄陽から東海にかけての江淮一帯の荒田開発の対策として、部下とともに屯田のマニュアルをつくった。開墾の募集に応じた者は、六年間、租税と一切の雑役が免除された¹⁰¹⁾。ちょうどハルガスが罷免され、アントムが中書右丞相に任じられて新体制(参政のブルミシュカヤ、サルドミシュ、右丞の盧世栄、左丞の史枢、参議のバイシンはみなサンガの推薦)が発足した時期¹⁰²⁾、「論中書省以下大小官吏諸色人等詔赦」(至元二一年)、「清冗職詔」(至元二二年七月李謙撰)が出された時期のことである(公式記録ではチンキムは二二年暮れに死亡。年月日、ケシク名、場所、その場に

いたケシクのメンバー、上奏者をすべて記す形式のモンゴル語直訳体の資料は、至元二三年以降しか確認できない。それ以前のものは、『元典章』をはじめ意図的に編纂官によってケシクのメンバーが削除、編集されている。このことから『実録』の史料としての限界がうかがえる¹⁰³⁾。テゲは、二二年、中奉大夫（従二品下）から正奉大夫（従二品上）に位階を進めるや、司農寺を以前のごとく正二品の大司農司にひきあげ、天下に大元ウルスの重農政策の姿勢を知らしめるよう、さらに附設機関として供膳司を設立するよう、奏上した。その結果、翌二三年二月に、農桑を掌る機関として再び大司農司の設立が決定され、かれは資善大夫（正二品下）、大司農に昇進、名実ともにポロトの後釜となったのである。同時にかれが兼任する宣徽院も正二品に引き上げられた¹⁰⁴⁾。

テゲの同僚のうち、司農卿のクトゥダルは、至元十七年前後、宣徽院ともかかわりの深いブラルグチ（遺失物監理官）として屯田開発にあたっている¹⁰⁵⁾。上述の農政院の傘下に入る直前のことである。至元二五年からクビライ末年まで、朝列大夫（従四品下）司農少卿、中議大夫（正四品上）司農卿、資善大夫（正二品下）司農卿へと猛スピードで昇進したコルギスは、モンゴルのアルチダイ氏の出身——曾祖父のバルス・ブカは、ナイマン、キプチャク、ルーシ、イラン遠征などの前線にて奮迅した武将——でやはりクビライのバウルチであった。かれの父は、至元十二年頃、ポロト、ムバーラクの推薦によってクビライに取り立てられたから、テゲとはきわめて近い間柄だったに相違ない¹⁰⁶⁾。さらに、大司農丞には、かの張文謙の子、張晏が任じられる（かれの妻は董文用の姪）¹⁰⁷⁾。至元七年の再現の雰囲気が、濃厚にたどよう人事であった。

そして、六月十日、正式に大司農司の設立を天下にしらしめす聖旨が発され、同日、『農桑輯要』をふたたび刊行して各路に頒布する聖旨もくだされた¹⁰⁸⁾。あきらかに大司農司の復活を記念した出版であった（興文署は至元二七年正月に復興するから¹⁰⁹⁾、この時点ではおそらく機能していない。むろんかつての版木そのものは利用できたが、国家出版センターとなっていく杭州の西湖書院で新たに刊行しなおした可能性がたかいだろう）。さらに、二日後、中書省によって文書化された「大司農司設立の聖旨」の末尾に、至元七年二月の司農司設立のさい張文謙等が定めた条画「農桑之制」十四条をそのまま附して頒布させたのである¹¹⁰⁾。「区田法」も、かつてと同様、各路において版木に刻され、広くばら撒かれたのはいうまでもない。

ちなみにこの時期、『本草』の増修をはじめ、大司農司の設立が決定された至元二三年二月、太史院では、李謙がチンキムの命を受けて三年前から取り組んでいた『暦経』、『暦式』、『暦議』等全二一巻をアルゲンサリと献上¹¹¹⁾、至元二四年、勸農ともふかくかわる『春牛經式』を頒行¹¹²⁾するなど、各官庁では編纂事業が活性化していた¹¹³⁾。地理書『大元大一統志』の編纂も、至元二二年六月頃に企画がもちあがり、二四年頃から本格的に開始される¹¹⁴⁾。南宋接收から数えてちょうど十年ということもあるが、至元十九年秋に断行した遷転制——江南の官員の位階の相当激しい引き下げをとまった——¹¹⁵⁾が定着し、またこの時期、江南の投下

領、路分がほぼ確定したのであった¹¹⁶⁾。大司農司復活の聖旨がくだされて一ヶ月後には、江南の官田管理のためにまず宮田総監府が設立されている（前年から盧世榮等の上奏にしたがって南宋接收の混乱の中で占拠された官田の買い戻しははじまっていた）。

ひるがえって、至元二三年八月末から、腹裏^{フォルンウルス}の各路、府、州、県のダルガと総管、各長官について管内勸農事を兼ねることが義務付けられ、各叙任状に朱筆で追記された¹¹⁷⁾。十二月二六日には、提刑按察司に吸収されていた巡行勸農司も復活、“漢児^{キタイ}の地面”つまり華北を六道に分けて設置することが決まった¹¹⁸⁾。前年の二月、中書省の盧世榮は、サンガ、江淮行省のマンガタイ等の意向をうけ、江南行台の廃止、提刑按察司を提刑轉運司に改め——弾劾ではなく錢穀を扱う機関にする案を上奏しており、その長期討議の結果、であった（江南行台は、廃止は免れたが、ムスリム官僚を増員し、至元二二年から二九年の間に杭州、江州、杭州、建康、揚州、建康と移転を繰り返すことになる¹¹⁹⁾）。

いっぽう、江南については、至元二四年二月三日、かつてミール・フーシン、張守智が暫定的につとめた江淮行大司農事を二品に一挙にひきあげ、鎮江路に正式に行大司農司を開いた。さらに行大司農司の附属機関として、勸農宮田司（四品）を六道に分けて設置、正使、副使をそれぞれ一名ずつ置いた¹²⁰⁾。初代行大司農にはモンゴル人のトクト、司農卿、司農少卿にはサンガの腹心王虎臣、ウマルが着任した¹²¹⁾。ふくれあがる官吏の俸米、ケシクの口糧、軍馬の糧料、工匠の役糧の支給を支えるために、江南の開発は急務であった¹²²⁾。遅々として進まぬ占拠された旧南宋の官田の返還、納税、差役をのがれるためになされた不動産、家族数の虚偽申告のチェックのため、聖旨に付した条画の中で、百日の期限をきって自首を促し、従わない者に罰則を定めた¹²³⁾。

江南経営の本格化と呼応して、閏二月には、アフマド時代への回帰がうたわれ、中書省から尚書省が独立し、サンガが平章政事となった¹²⁴⁾。ナヤンをいただく東方三王家の反乱をはさんで（大司農のテゲはクビライにつきしたがって征伐に向かい軍功をたてた）、至元二十五年正月、クビライはマンガタイを江淮行省の左丞相とし、あらためて行大司農司と各道勸農宮田司に対して詔を出し、府、州、県の勸農官の勤務評定、路の経歴官、県尹の処分権を確認した。また江淮行省の上奏にしたがって、淮東、淮西の二道に勸農宮田司の増設を許可した¹²⁵⁾。そして、とうじ僉江淮行尚書省事で発案者でもあった燕公楠（サイン・ナンキャダイ “よき南人”の意）を行大司農に、南宋時代、市舶司の職にあり、留夢炎等と親交のあった李晞顔を行司農丞に任命したのである¹²⁶⁾。のちに任仁発、潘応武が回想したように、江南の水利は帰附以来、マンガタイ、燕公楠をトップに整備された¹²⁷⁾。

ところが、じゅうらい指摘されていないことだが、そのご至元二六年の三月から六月二八日の間に行大司農司は行司農司に格下げになった¹²⁸⁾。ほぼ同じ頃、燕公楠は江淮行中書省参知政事に異動する。サンガ、マンガタイ体制の崩壊をいちやく予見したためだろう。みずから

弾劾にまわるいっぽうで、バヤンや大司農司のボスであるテゲ、董文用、コルギス、そしてのに水利事業に大きな役割を果たすチェリ等との関係を強めておくことも忘れなかった¹²⁹⁾。

行司農司への格下げの後まもなく、至元二七年三月十七日、中書省、尚書省、御史台、大司農司の合議の結果、至元十三年のボロト、張文謙のときの前例に依拠し、行司農司所属の勸農司をいちおう結果は出たとして廃止した。そして、按察司と合併、各按察司に二人の僉事を増員し、農桑関連の事項は大司農司に、書類のチェックや弾劾等は御史台に申告することになった¹³⁰⁾。さらに翌二八年正月、サンガとその一党が罷免され¹³¹⁾、二月、提刑按察司が肅政廉訪司に改組されると、江南と同様、腹裏の勸農司も廃止、各道の肅政廉訪司が吸収するところとなり、それぞれ僉事二、経歴一、知事一、照磨一が増員された（至元二九年閏六月の聖旨によれば、肅政廉訪司の巡行官は、各路が勸農に実績のあった官員を保挙する場合、もしくは社の長が村人の有能な者を推薦する場合に、その推薦書類の再審査をおこなう。文書を滞らせる司吏についてはその上司を取調べ、いずれも大司農司に報告書を提出して処分を仰ぎ、上司——路、府、州の提点官が文書を滞らせる元凶であれば、大司農司が直接取り調べる¹³²⁾。三月には詔が出され、その条画によれば、一年のうち三月の初めから九月の終わりまで、凡そ労民不急の役は、一切停止すること、義倉の最初の精神を忘れず余ったからといって河倉に転送したりせず飢饉の年に備えることなどがうたわれていた¹³³⁾。さらに、至元七年、二三年の「農桑之制」十四条をふたたび頒布した。いずれが『元史』卷九三「食貨志」《農桑》のいう「農桑雜令」なのかは不明である¹³⁴⁾。五月には『至元新格』も版行、各官庁に配布されている¹³⁵⁾。なお、十二月十五日には、江南の各路の官が現地を勸課農桑のために巡行するシステムは、接待が大変でかえって人々が迷惑することから、廃止が決定され、そのつど指導の文書を下すことになった¹³⁶⁾。ちなみに、この月にかつて大司農司の廃止とともに消滅していた都水監が復活する。

そうしたなかで、テゲは、至元二九年三月、大司農、同宣徽院事兼領尚膳監事の職のうえに、さらに中書平章政事を命ぜられる（尚書省は前年五月に廃止、中書省に吸収¹³⁷⁾。資品も資善大夫（正二品下）から榮禄大夫（従一品下）にあがった。かれは、翌年の三月十三日、燕公楠の上奏をクビライに取り次ぎ、官吏、僧道、権豪の家が隠匿する田地を摘発し課税するために、江南に行大司農司を設置することを請い、聖旨——行中書省、行枢密院、行御史台、行宣政院、行泉府司、宣慰司、廉訪司以下あらゆる人々に示す命令文を得た。こんかいは、鎮江路ではなく“蘇湖熟せば天下足る”¹³⁸⁾といわれる浙西は蘇州（平江路）に官庁を設置、大司農司ではなく都省に直属することとし、クルトガを行大司農司事に、燕公楠を再び行大司農に任命、鎮江時代と同様、受宣官七名、受勅官僚四名、計十一名をこの行大司農司に貼り付けた。ところが、ちょうど一ヵ月後には、やはり燕公楠の案で、淮東、淮西も管轄することを考えて揚州に官庁を置くことになった¹³⁹⁾。いま、まさに任仁発や土地の故老等の協力のもとに、本格的な江南の水利事業がはじまろうとしていた¹⁴⁰⁾。

大司農司は、路府州のダルガ、総管たちの解由状に書かれた農事、学校、樹株、義糧などの項目の数字と各官庁の帳簿が一致しない場合の罰俸を定め、肅政廉訪司にも過去の書類の審査をさせて、毎年の成果を正確に掌握しようとつとめた¹⁴¹⁾。そして、一年の末に、各路から送られてくる実績報告書——開墾した田畑の面積、新たに建てられた学校数、蓄えた義倉の糧食の総量、植樹した桑、棗、雑果の本数を合計し、カアンに知らせた。

ところが、こんにち『元史』の「世祖本紀」には、腹裏に大司農司が再び設置され『農桑輯要』、「農桑之制」十四条が頒布された至元二三年、江南の大司農司が機能しはじめた二五年、再度「農桑之制」十四条を頒布した二八年の数字しかのこっていない¹⁴²⁾。そして、じつは歴代カアンの本紀を通じて、後にも先にもこの三年のみ、なのである。これは、果たしていったい何を意味するのだろうか。

(つづく)

付記 本稿は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究 B）による研究成果の一部である。

注

- 1) 杉山正明『大モンゴルの世界』（角川書店 1992 年 121 頁）
- 2) 張光大『救荒活民類要』『元制』『農桑』によって、至元六年八月の詔の一節を引用したものと知れる。この書については、拙稿『『対策』の対策——大元ウルス治下の科举と出版』（『古典学の再構築』V 2003 年 1 月 のち『モンゴル時代の出版文化』380-484 頁に再録 名古屋大学出版会 2006 年）参照。そのご、崔允精「元代救荒書と救荒政策——以《救荒活民類要》為依拠」（『元史論叢』9 2004 年 7 月 207-219 頁）、井黒忍「『救荒活民類要』に見るモンゴル時代の区田法——カラホト文書解読の参考資料として」（『オアシス地域研究会報』5-1 2005 年 3 月 24-52 頁）、古松崇志「元代カラホト文書解読（2）」（『オアシス地域研究会報』5-1 2005 年 3 月 53-97 頁）が出た。
- 3) 銭大昕をはじめとする幾人かの考証学者が真摯にとりくみ補った『元史芸文志』も、数百年を経てわずかに伝来した典籍（それも自らが閲覧できたものは限られていた）とさまざまなかたちの文献から採集した記事によって構築せざるをえなかったため、ときには誤りも見受けられる。
- 4) 『北京図書館蔵歴代石刻拓本匯編（元二）』第 49 冊（中州古籍出版社 1990 年 197 頁）「大元勅修曲阜宣聖碑」「〔世祖皇帝〕命御史台以勉勵校官，国子監学以訓誨胄子，大司農以興学社学，興文署以板行海内書籍，提举、教授以主領外路儒生、宿衛子弟咸遣入学」。
- 5) もっとも、国会図書館には、明の嘉靖十六年（1537）、湖北の鄖陽府において知府の許詞が刊行したテキスト（白口有界 10 行×21 字）があった。『万曆鄖陽府志』（名古屋市蓬左文庫蔵）巻二四「宦蹟・許詞」において「『農桑節要』一篇を配布した」と特筆されるまさにそのテキストである。『格知叢書』と同様、モンゴル時代の序跋は一切附されておらず、とうじ鄖陽府の同知であった章釗の後序しか載っていない。しかもその序文を見ると許詞自らが編纂した書物とい

うことになっている（米国国会図書館蔵旧北平図書館マイクロフィルムの明刊本『養民月宜』も、じつは魯明善の『農桑衣食撮要』の書名をつけ換えて出版しただけで、とうじ剽窃行為は日常茶飯事であった）。嘉靖本にしては、めずらしく端正な書体で刻されており、ところどころに見える欠字からは、底本の版木が相当摩滅していたことが窺え、じつは、元刊本の重刊である可能性がきわめて高いのだが、こんにちに至るまでまったく注目されなかったのである。

- 6) 三木栄『朝鮮医書誌』（1956年 自家出版 304-305頁）、天野元之助『中国農業史研究』（御茶の水書房 1962年 473-482頁）、同「元、司農司撰『農桑輯要』について」（『東方学』30 1965年7月 50-67頁）、同『中国古農書考』（龍溪書舎 1975年 130-140頁）、金容燮「高麗刻本《元朝正本農桑輯要》를 통 해서 본 《農桑輯要》의 撰者와 資料」（『東方学志』65 1990年3月 53-76頁）
- 7) 『高麗史』卷一二「僂遜長寿傳」。詳しくは、拙稿『『混一疆理歴代国都之図』への道——14世紀四明地方の『知』の行方——』（『絵図・地図からみた世界像』2004年3月 のち『モンゴル時代の出版文化』487-651頁に再録）、「モンゴルが遺した『翻訳』言語——旧本『老乞大』の発見によせて——（下）」（『内陸アジア言語の研究』19 2004年7月 のち『モンゴル時代の出版文化』177-268頁に再録）参照。
- 8) 『高麗史』卷三七「忠穆王世家」“丁巳，元流忠惠王嬖人崔和尚于靖州路，林信于彬州路，朴良衍于州路，閔渙于辰州路，金添寿于永州路，林以道于桂陽路，承信于埽州路，南宮信于道州路，王碩于金州路”とあり、『救荒活民類要』に序文を寄せ校正を担当した高麗のオルジェイトゥは、桂陽路の総管であった。
- 9) 『攷事撮要』下「八道程途別号，冊板并附」《慶尚道・八日程・陝川》，『太宗康献大王実録』卷三一〔十六年（1416）五月戊戌〕，『世宗莊憲大王実録』卷十七〔四年（1422）八月丙午〕，同卷七七〔十九年（1434）六月辛未〕，同卷八六〔二十一年七月壬戌〕等参照。また，『太宗康献大王実録』卷三三〔十七年（1417）五月〕には“己酉，京畿採訪判官樞審，進黃真絲与繭。初芸文館大提学李行，於農桑輯要内，抽出養蚕，方自為經驗，所収倍常，遂板刊行于世。国家慮民間未解華語，命議政府舍人郭存中，将本国俚語，逐節夾註，又板刊広布。然非我国素習，皆不楽為之。至是，命拆各道閑暇有桑之地，分遣採訪，属典農寺奴婢，免其雜役，使之養蚕，以示民間。又令後宮，親自養焉。多有所得”という実に興味深い記事もある。やはり卷三，卷四が重視されたのである。諺解，ハングルは世宗のときに開発されたことになっているから，このときの朝鮮語の注釈は吏読であろうか。
- 10) 『救荒活民類要』「元制」《農桑》
- 11) 『元史』卷四「世祖本紀」〔中統元年五月乙未〕
- 12) 『永樂大典』卷一〇八八九元明善「雍古公神道碑銘」，『国朝名臣事略』卷七「平章廉文正王」，『道園類稿』卷三八「曹南王勲德碑」，『危太樸文統集』卷二「故翰林学士承旨資善大夫知制誥兼修国史贈推忠輔義守正功臣集賢学士上護軍追封淡水郡公諡忠実嘉耶律公神道碑」等参照。
- 13) 『秋澗先生大全文集』卷八〇「中堂事記上」〔中統二年正月壬子〕。なお，至元二四年成立の『中堂事記』と『元史』の「世祖本紀」，華北碑刻の間の暦と事件のズレについては，別稿であらためて論じることとする。
- 14) 『秋澗先生大全文集』卷八一「中堂事記中」〔中統二年五月八日〕
- 15) 『元史』卷四「世祖本紀」〔中統二年四月乙卯〕
- 16) 『秋澗先生大全文集』卷八一「中堂事記中」〔中統二年五月廿六日〕，『国朝文類』卷六〇姚燧「中書左丞姚文獻公神道碑」，『国朝名臣事略』卷八「左丞姚文獻公」

- 17) 『元史』卷四「世祖本紀」[中統二年八月丁未]
- 18) 『三晋石刻総目 運城地区卷』(山西古籍出版社 1998年 25頁)
- 19) 『元史』卷五「世祖本紀」[中統三年夏四月甲辰]
- 20) 『元史』卷五「世祖本紀」[中統四年五月戊戌]、卷六「世祖本紀」[至元二年正月乙酉]、卷一三四「月合乃伝」。『紫山大全集』卷九「西治記」に“我朝右武重農、田畝日闢、疆土歲拓、鼓冶鑄鍊、明不可廢。某年立銅冶總管府、鈐束諸道冶。三年而上計戸曹”というように、いご、朝廷の主導によって農器の作製、支給が継続されていくことに注意すべきである。
- 21) 『事林広記』(北京大学図書館蔵元刊本)戊集卷上「官制類」【官職新制】
- 22) 『齊乘』卷三「郡邑」、『元史』卷六「世祖本紀」[至元二年閏五月丁卯]、[至元二年冬十月癸未]
- 23) 『元史』卷六「世祖本紀」[至元二年二月甲子]、『国朝名臣事略』卷一〇「平章宋公」“至元二年、罷世襲官、初行遷転法”。
- 24) 『元史』卷六「世祖本紀」[至元二年正月乙酉]、[至元二年五月甲寅]、[至元二年閏五月丙寅]
- 25) 『元典章』卷六「台綱」《内台》【設立臺台格例】、《体察》【察司体察等例】、卷十一「吏部五・職制」《給由》【解由体式】“一、本官任内、提点過農桑実績、依已行備細開款申報。如不係提点官員、亦云並不曾提点農事”、『大元官制雜記』(『永樂大典』卷一一一八)「按察司官」
- 26) 『元史』卷六「世祖本紀」[至元六年八月丙申]。詔の全文は、『救荒活民類要』「元制」《農桑》参照。
- 27) 『国朝文類』卷四〇「經世大典序録」《常平義倉》
- 28) 『元典章』卷二「聖政一」《勸農桑》、『元史』卷七「世祖本紀」[至元七年二月壬辰]。『通制条格』卷十六「田令・立社巷長」、『元典章』卷二二「戸部八・課程」《免税》【倒死牛肉不須税】などは、当該機関が尚書省の指令下にあったことをうかがわせる。
- 29) 『成化順德府志』卷三王磐「張氏先德之碑」、『国朝文類』卷五八李謙「中書左丞張公神道碑」、『元史』卷一五七「張文謙伝」、『国朝文類』卷五〇齊履謙「知太史院事郭公行状」、『元史』卷五「世祖本紀」[至元元年五月乙亥]、『道園学古録』卷二〇「翰林学士承旨董公行状」
- 30) 『牧庵集』卷二四「譚公神道碑」
- 31) 『大元官制雜記』「巡行勸農司」、「初立巡行勸農司条画」、『永樂大典』卷一九四一七「站赤二」“至元七年十月二十六日司農司言四道巡行勸農官、乘駟勸課、所過無之處合無從按察司巡歷体例、乘坐馬匹、請区处事”、『国朝文類』卷六〇姚燧「中書左丞姚文献公神道碑」
- 32) 『国朝文類』卷四九虞集「翰林学士承旨董公行状」、『民国藁城縣志』卷十二王磐「趙国忠穆公神道碑」、『臨川吳文正公集』卷六七「趙国董忠穆公墓表」、『国朝名臣事略』卷十四「内翰董忠穆公」
- 33) 『元史』卷一五三「高天錫伝」“天錫語丞相李羅、左丞張文謙曰「農桑者衣食之本、不務本則民衣食不足、教化不可興、古之王政、莫先於此。願留意焉」。丞相以聞、帝悅命立司農司、以天錫為中都山北道巡行勸農使兼司農丞、尋遷司農少卿、巡行勸農使”。
- 34) 李逸友『黒城出土文書(漢文文書卷)』(科学出版社 1991年 101-106頁)
- 35) 『燕石集』卷十二「司農司題名記」、『国朝文類』卷六八「平章政事致仕尚公神道碑」
- 36) W. M. Thackston, *Rashiduddin Fazlullah, Jami 'u' t-tawarikh: Compendium of Chronicles, Part one, part one, chapter four, section two: the Niru'un, the Dörbän Clan*, Harvard University, 1999, p. 104.
- 37) 『国朝名臣事略』卷一〇「宣慰張公」
- 38) 『元史』卷七「世祖本紀」[至元七年十二月丙申朔]

- 39) 『元典章』卷二八「礼部一・礼制」《迎送》【迎接合行礼数】、『通制条格』卷八「儀制」《賀謝迎送》、『元史』卷六「世祖本紀」[至元六年冬十月己卯]，卷七「世祖本紀」[至元七年二月丙子]，[至元八年三月甲戌]，[至元八年十一月乙亥]，卷六七「礼楽志」《制朝儀始末》。なお、このときのメンバーである尚文は、大司農司の都事をつとめたあと右直侍儀使となり、そのごふたび旧職にもどっているし、周鐸の子の周之翰は、やはり大司農司の掾、照磨をつとめたあと侍儀通事舎人となっている。『秋澗先生大全文集』卷四三「朝儀備録叙」、『滋溪文稿』卷十七「元故奉訓大夫冠州知州周府君墓碑銘」、『国朝文類』卷六八「平章政事致仕尚公神道碑」参照。
- 40) 『秋澗先生大全文集』卷三七「絳州正平県新開溥潤渠記」“至元改号之六載，詔立大司農司，其品秩僚属，特与兩府埒，蓋以農桑大本，滋殖元元，莫斯為重。故崇職掌開籍田，以率先天下。外建行司曰使，曰副。歲時巡視，責郡県長吏，条綱甚悉，考其成績，而明殿最”。
- 41) 『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《立司》【復立大司農司】。このクビライの聖旨を収める一葉は、「聖旨」「奏」といった聖なる語の改行・抬頭が行われておらず、本来あるべき状態より7行ほど少なくなっている。その前の【立司農司】も“見聖政勸農桑類”として省略されてしまい、指定された『元典章』卷二「聖政一」《勸農桑》をみても、聖旨本文のみで付帯条項たる勸農条画がまったく収録されていないので、【復立大司農司】にいう“已降聖旨条画”が参照できない。
- 42) 『元典章』卷三〇「礼部三・礼制」《祭祀》【祭社稷風雨例】、『元史』卷七六「祭祀志」《風雨雷師》。『析津志輯佚』「風俗・立春」も参照。
- 43) 『元史』卷七「世祖本紀」[至元九年二月戊申]，卷七六「祭祀志」《先農》、『元典章』卷三〇「礼部三・礼制」《祭祀》【祭郊社風雨例】
- 44) 『国朝文類』卷五八李謙「中書左丞張公神道碑」
- 45) 『廟学典礼』卷一「祀奠服色」
- 46) 『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《栽種》【道路栽植榆柳槐樹】、『通制条格』卷十六「田令」《農桑》
- 47) 『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《水利》【興举水利】
- 48) 『大元官制雜記』「大司農司」“大徳八年十二月四日，本司官集議為無公廩，止於旧吏部内署事。本司所領天下農桑及供給内府，不為不重，未備廩宇，誠失觀瞻，移文左警巡院，置買蓬萊坊王同知宅一区，作公廩……”。
- 49) 『元史』卷一六〇「孟祺伝」、『甘水仙源録』卷四「応縁扶教崇道張尊師道行碑」
- 50) 『秘書監志』（中国国家図書館蔵影元鈔本）卷一「職制」《立監》、《設監》，卷七「司属」《司天監》
- 51) 『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《立司》【復立大司農司】、『元史』卷八「世祖本紀」[至元十年三月甲寅朔]
- 52) 翌至元十一年には、ボロト等が編纂した『立社稷壇壝儀式』も諸路に頒行されている。『元史』卷八「世祖本紀」[至元十一年八月甲辰朔]
- 53) 『元典章』卷一「詔令」【立后建儲詔】
- 54) 『秋澗先生大全文集』卷九一「開種兩淮地土事状」
- 55) 『四時纂要——中国古農書・古歳時記の新資料』（守屋美都夫解題 山本書店 1962年 30-345頁）
- 56) 『玉海』（建仁寺両足院蔵元刊本）卷一七八「賈思勰齊民要術」“後周竇儼，請於齊民要術及四時纂要、韋氏月録中，采其関田蚕園圃之事，集為一卷，頒下諸州。宋朝天禧四年八月二十六日，利州轉運李昉請頒行四時纂要、齊民要術二書”。『宋史』卷二六三「竇儼伝」、『宋会要輯稿』「食

貨・農田雑録」

- 57) 『金史』卷四七「食貨志二」
- 58) 『博聞録』については、拙稿『混一疆理歴代国都之図』への道——14世紀四明地方の『知』の行方——(『モンゴル時代の出版文化』537-539頁)参照。
- 59) 一、蚕利最博、養育寔難、如浴連生蟻、初飼成眠、以至上簇、必須遵依蚕書、一切如法、可収倍利。嘗聞山東農家因之致富者、皆自絲蚕。旬月之勞、可不勉勵。
- 60) 『貢礼部玩斎集』卷六「送脩敬宗序」“予始至京師時、東平諸公能言金進士脩君為郡幕府、有文学政事。後又聞、其子謙、舉進士、判沅州。孫思善、教授益都儒学、皆克世其業……”。
- 61) 『通鑑統編』(台湾国家図書館蔵元刊本)卷二二「辛亥十一年冬十一月」
- 62) 『元史』卷九「世祖本紀」[至元十三年九月庚子]
- 63) 『元史』卷一五三「高天錫伝」、『長安志図』卷下楊景道「論水之善」
- 64) 雲南王フゲチのもとで大理の勸農官兼領屯田事をつとめ農桑、水利に実績を示していた張立道は、至元十年、ボロト、張文謙等の指名をうけて大理等処巡行勸農使となった。東平とならんで栽桑、養蚕の盛んな河北大名の出身であったかれ(父の張善は金の進士であったという)は、雲南で熱心にその技術指導にあたり、十倍以上の収益を挙げるようになったという。『元史』卷一六七「張立道伝」参照。
- 65) 『康熙高唐州志』卷四〇閭復「吉公士安去思碑」“齊右繭絲沃壤、視他郡為最。君謂歲入豐俟、係人力之勤惰、勸課弗嚴、長吏之責也。乃遵『農桑要旨』、勗民耕耨、懇切至到。良農之訓誨子弟、不啻過焉”。
- 66) 『東方見聞録』でも栽桑、養蚕、絹布の生産地として涿州、太原、河間、河中、京兆などとともに東平府を挙げる。
- 67) 『松雪斎文集』卷八「大元故嘉議大夫燕南河北道提刑按察使姜公墓誌銘」
- 68) 『山左金石志』卷二一王磐「墓公元帥先塋之碑」“至元五年、路委之勸課農桑。公為立芸桑育蚕之法、數年民獲利增倍”、『元史』卷一六五「墓公直伝」。
- 69) 『嘉靖山東通志』卷二五「名宦上・高伯温」
- 70) 『元史』の伝では、皇慶二年に燕南河北道肅政廉訪使に除せられたというが、『山右石刻叢編』卷三〇「中條孫氏先塋碑銘」によれば、至大三年にすでにその肩書きをもっている。
- 71) 『秘書監志』卷七“至元十年十一月初七日、太保、大司農奏過事内一件：「興文署掌雕印文書、交属秘書監呵、怎生？」、奉聖旨「那般者」。欽此”。『欽定天祿琳琅書目』卷五「資治通鑑」。王磐の『資治通鑑』の序文によれば、興文署の最初の刊行物のひとつは、『資治通鑑』であった。かれの肩書きは、翰林学士となっており、至元十七年以前に書かれたとみて間違いないだろう。
- 72) 『元史』卷八「世祖本紀」[至元十一年三月己卯]、『高麗史』卷二七「元宗三」[十五年五月庚子]
- 73) 『元史』卷八「世祖本紀」[至元十二年夏四月丁卯]、卷九「世祖本紀」[至元十四年五月癸卯]、卷一〇「世祖本紀」[至元十六年五月辛亥]、『大元官制雜記』「巡行勸農司」、「初立巡行勸農司条画」。なお、『大元官制雜記』の二箇所の“至元二十二年”は“至元一十二年”の誤りである。
- 74) 『秋澗先生大全文集』卷六二「勸農文」は、至元十四年から十七年にかけて王惲が河南北道、燕南河北道の提刑按察副使をつとめていたときの成果である。かれは、姚枢の東平宣撫使時代に従行したこともあり、農桑についてかなり詳しかった。
- 75) 『国朝文類』卷二三閭復「太師広平貞憲王碑」“弱歲襲爵、統按台部衆。世祖皇帝聞其賢、駢召赴闕、見其風骨彪厚、解御服銀貂以賜。国朝重天官内膳之選、特命領其事。侍宴内殿、公起行酒、

詔諸王妃皆執婦道。未幾拜御史大夫”。

- 76) 『大元官制雜記』「肅政廉訪司」
- 77) 『国朝文類』卷十七楊桓「太史院銘」
- 78) 『元史』卷九「世祖本紀」[至元十四年二月丁亥]、『元典章』卷八「吏部二・官制」《承襲》【軍官降等承襲】、『国朝文類』卷六八李昉魯翀「大都路都総管姚公神道碑」、『山右石刻叢編』卷三四劉致「姚天福諡議碑」，虞集「姚天福墓表」
- 79) 御史台が大司農司と同じ正二品となるのは，至元二一年，後述する中書右丞相のハルガスンがカアンに願い出て以後のことである。その結果，御史大夫のウルルク・ノヤンは従二品から従一品となる。『永樂大典』卷二六〇七「經世大典」，卷二六〇八「憲台通紀」【御史台陞正二品】
- 80) 『元典章』卷八「吏部二・官制」《選格》【循行選法体例】
- 81) 至元十六年，太常寺によって提出された『至元州県社稷通礼』も，至元十一年の段階で諸路に頒行されていたボロト等編纂の『立社稷壇墼儀式』を踏まえているはずである。『元史』卷八「世祖本紀」[至元十一年八月甲辰朔]，卷一〇「世祖本紀」[至元十六年三月甲戌]
- 82) 『元史』卷一〇「世祖本紀」[至元十五年三月乙巳]，[六月甲戌]，卷一二八「相威伝」
- 83) 『元史』卷十一「世祖本紀」[至元十八年十月壬子]，卷八七「百官志・大司農司」，『燕石集』卷十二「司農司題名記」，『元史』卷一〇〇「兵志三・屯田」《枢密院所轄》“武衛屯田：世祖至元十八年，発遼南軍人三千名，於涿州、霸州、保定、定興等処置立屯田，分設広備、万益等六屯，別立農政院以領之”。
- 84) 『元史』卷十二「世祖本紀」[至元十九年六月癸丑]，『秘書監志』卷一「為革罷司徒府事」
- 85) 『元史』卷二〇五「姦臣伝」。ちなみに，『大元至元弁偽録』卷五によれば，司徒府，農政院の設立直後の至元十八年九月，全真教の放火事件，偽道藏經の審議にあたったのも枢密副使のボロトと守司徒のハルガスンである。
- 86) 『程雪樓文集』卷五「弘林忠献王神道碑」“癸未夏四月，忝可使西北諸王所者，以公嘗数使絶域，介丞相李羅以行。還遇乱，使介相失，公冒矢石出死地，兩歲，始達京師，以阿魯渾王所贈宝裝束帶進見，令陳往復狀，上大悦，顧廷臣嘆曰「李羅生吾土食吾禄，而安於彼，愛薛生於彼，家於彼，而忠於我，相去何遠耶」。拜平章政事，固辞……公起家為定宗近侍，中統間，掌西域星曆、医藥二司事，至元戊辰，兼広恵司” *Rashiduddin Fazlullah, Jami 'u' t-tawarikh: Compendium of Chronicles, Part three, part two, chapter two, section fifteen: Arghun Kahn, p. 565.* 余大鈞「蒙古朵児辺氏李羅事輯」（『元史論叢』1 中華書局 1982年 179-196頁）も参照。なお，至元二〇年十月，後任の枢密副使には，平章政事のジャサンが命じられる。
- 87) Karl Jahn, the still missing works of Rashīd al-Dīn, *Central Asiatic Journal*, Vol. 9, No. 2, 1964, pp. 113-122. 本田實信『『ラシード全著作目録』について』（『西南アジア研究』23 1984年 のち『モンゴル時代史研究』に再録 東京大学出版会 1991年 383-386頁），同「ラシード・アッディーンの『中国史』について」（『東方学』76 1988年 のち『モンゴル時代史研究』387-404頁に再録），岩武昭男「ラシード著作全集の編纂——『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より——」（『東洋学報』78-4 1997年 3月 1-31頁），A. K. S. Lambton, *The Āthār wa aḥyā' of Rashīd al-Dīn Faḍl Allah Hamadānī and His Contribution as an Agronomist, Arboriculturist and Horticulturalist*; Reuven Amitai-Preiss, David O. Morgan ed. *The Mongol Empire & its Legacy*, Brill, 1999, pp. 126-154.
- 88) Minuvi, Mujtabā, *Tanksūq-nāmeḥ: Collected works of Rashīd-al-dīn Fadlallh*, Vol. 2 1972, 519 p.

- 89) 羽田亨「『ペルシア語訳『王叔和脈訣』の中国語原本について」(『アジア・アフリカ言語文化研究』48-49 1995年1月 719-726頁)
- 90) 『難経古注集成1』(東洋医学研究会 1982年)に全書の影印が収録される。
- 91) 『玉海』巻六三「天聖鍼経」,『曝書亭集』巻四六「太医院銅人腧穴図拓本跋」。なお、北京において、『新鑄銅人腧穴鍼灸図経』を刻した碑石の一部が、次々と発掘されている。明清の間に城壁の資材として転用されたらしい。
- 92) 『碩宋樓藏書志』巻四七「医家類五・新刊惠民御藥院方」,『癸巳新刊御藥院方』(国立公文書館蔵朝鮮版)十一巻
- 93) 『元史』巻十三「世祖本紀」[至元二一年十二月癸酉],『元史』巻十五「世祖本紀」[至元二五年九月庚戌],『秘書監志』巻四「纂修」《節次奏文》,『牧庵集』巻二九「南京路医学教授李君墓誌銘」,『至正集』巻三一「大元本草序」,『滋溪文稿』巻二二「資善大夫太医院使韓公行状」
- 94) 『金史』巻四五「刑志」
- 95) 『秋澗先生大全文集』巻六〇「故趙州寧晋県善士荆君墓碣銘并序」
- 96) 『青崖集』巻四「奏議」は、至元八年十二月二五日のこととするが、現存のテキストが『四庫全書』本のみなので、『元史』巻七「世祖本紀」にしたがっておく。
- 97) 拙稿「モンゴルが遺した『翻訳』言語——旧本『老乞大』の発見によせて(下)——」(『モンゴル時代の出版文化』242-243頁)において、朝鮮王朝の司訳院で使用されたモンゴル語の教科書『巨里羅』(とうじの朝鮮漢字音では kolira)をモンゴル語の kerel, gerel に判定した。しかし、音価はもとより、『経国大典註解』後集下「礼典・取才条」が記す「狐名也。設為狐与獅,牛問答之語」という内容からしても、原書はペルシア語の寓話集 *Kalila va Dimna* と見るのが正しい。ここに謹んで訂正したい。1320~30年代に、大元ウルスの文官でネストリウス派キリスト教徒のヤークートがモンゴル語に翻訳したものだが、*Tārīkh-i Guzida*『選史』によれば、それとは別に、はやくはオゴデイ時代、モンケ、クビライたち兄弟が師事したイフティハールディーン・ムハンマド・カズヴィーニーによるモンゴル語訳があったという(Hamd-Allah Mustawfi Qazvini/ed. 'Abd al-Husayn Navā'i, *Tārīkh-i Guzida*, Tehran 1339/1960, p. 799)。ペルシア語文献もぎゃくにモンゴル語を介して中国、高麗へと流入していたことがわかる。
- 98) 『元史』巻十二「世祖本紀」[至元二十年正月乙丑], [至元二十年十一月戊辰],『燕石集』巻十二「司農司題名記」,『元史』巻一〇〇「兵志三・屯田」《枢密院所轄》
- 99) 喻震・黄秀純「元鉄可父子墓和張弘綱墓」(『考古学報』1986-1), 同「北京出土的元鉄可墓誌銘」(『首都博物館文集』燕山出版社 1990年), 侯堃「元《鉄可墓誌》考釈」(『北京文物与考古』二輯 1991年),『元史』巻一二五「鉄哥伝」,『臨川吳文正公集』巻六二「題秦國忠穆公行状墓銘神道碑後」,『永樂大典』巻一九四二二「站赤八」《六条政類》“至元二十九年正月初七日,忽都答兒怯薛第二日,紫檀殿裏有時分,火兒赤忽魯、速古兒赤伯顔参政、察罕不花、必闡赤明里帖木兒、兀賽、昔宝赤木八刺沙、折吉兒、月兒干、舍兒伯赤帖歌等,对這的每,完澤丞相、不忽木平章、咱喜魯丁平章、暗都刺參議、狗兒參議奏過事内一件”,『元史』巻一六八「許国禎・許扈伝」
- 100) 『元史』巻十「世祖本紀」[至元十五年二月戊午], 巻七六「祭祀志五」《先農》
- 101) 『元史』巻十三「世祖本紀」[至元二十一年冬十月壬子], [至元二十一年十一月癸卯], 巻一〇〇「兵志三・屯田」《宣徽院所轄》
- 102) 『永樂大典』巻一九四一八「站赤三」によれば、至元二一年十二月の段階では、中書省の右丞相はブルミシュカヤ, 参政はバイカン, サルドミシュである。

『農桑輯要』からみた大元ウルスの勸農政策（上）（宮）

- 103) ケシク制については、別稿にて詳しく述べる。
- 104) 『元史』卷十四「世祖本紀」[至元二十三年二月乙巳]
- 105) 『元史』卷十一「世祖本紀」[至元十七年六月一日]，[至元十八年閏八月壬戌]，本田實信「モンゴルの遊牧的官制——ユルトチとブラルグチ」(『小野数年博士頌寿記念東方学論集』 龍谷大学 1982 年 のち『モンゴル時代史研究』 69-82 頁に再録)
- 106) 『元史』卷一三四「闊里吉思伝」
- 107) 『国朝文類』卷五八李謙「中書左丞張公神道碑」“長曰晏，初侍裕宗於東宮，為府正司丞，世祖思功臣子孫，遷充刑部郎中，遷吏部郎中，大司農丞”，『国朝文類』卷六一姚燧「僉書樞密院事董公神道碑」，『常山貞石志』卷二〇張晏「趙国正献公董文忠墓碑」
- 108) 『元史』卷十四「世祖本紀」[至元二十三年六月乙巳]
- 109) 『元史』卷十六「世祖本紀」[至元二十七年正月癸酉]
- 110) 『通制条格』卷十六「田令」《農桑》，『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《立社》【勸農業立事理】，『救荒活民類要』「元制・条格」《至元二十三年六月中書省奏准立大司農司定到条画》，「救荒一綱・立義倉」《至元二十三年六月中書省奏立大司農司条画内一款》。なお、『救荒活民類要』には、乱丁がある。
- 111) 『国朝文類』卷十七「太史院銘」，『元史』卷十四「世祖本紀」[至元二十三年二月癸亥]
- 112) 『元典章』卷三二「礼部五・学校」《陰陽学》【春牛經式】，『類編曆法通書大全』（遼寧省図書館蔵明刊本）卷一「前朝公規」
- 113) 『永樂大典』卷一九四一八「站赤三」の至元二四年閏二月二五日の支給表に，“太史院鄒子龍、田惟詔等三十二人”，太医院の所屬として“編修本草劉仲思正從各一名”，“編修本草潘敞、杜章、王彬等三名”があがっている。
- 114) 『秘書監志』卷四「纂修」
- 115) 『元典章』卷八「吏部二・官制」《選格》【官員遷轉制】
- 116) 『元史』卷九五「食貨志三」
- 117) 『元典章』卷十一「吏部五・職制」《職守》【兼勸農事署銜】
- 118) 『大元官制雜記』「巡行勸農司」，「初立巡行勸農司条画」，『元史』卷十四 [至元二十三年十二月戊午]
- 119) 『元史』卷十三「世祖本紀」[至元二十二年二月辛酉，戊辰]，[十一月己巳朔]，『永樂大典』卷二六一〇「南台備要」【行台移江州】，【行台復移杭州】，『至正金陵新志』卷三下「年表」，卷六「大元統屬官制」
- 120) 『元史』卷十四 [至元二十四年二月甲辰]，『江蘇省通志稿』金石二〇「鎮江路儒学復田記」，『至順鎮江志』卷十三「公廨」
- 121) 『至順鎮江志』卷十七「寓治・行大司農司」，『元典章』卷十九「戸部五・田宅」《種佃》【開種公田】
- 122) 『水利集』卷三「水利問答」
- 123) 『元典章』卷十九「戸部五・田宅」《官田》【影占係官田土】，【民田】【漏報自己田土】，【田多詭名避差】
- 124) 『元史』卷十四「世祖本紀」[至元二十四年閏二月乙丑，辛未]
- 125) 『元史』卷十五 [至元二十五年正月辛卯，癸丑]，『元典章』卷十三「吏部七・公規」《署押》【官暫事故詣宅門押】
- 126) 『程雪樓文集』卷二一「資德大夫湖広等処行中書省右丞燕公神道碑銘」，『元典章』卷二二「戸

部八・課程】《市舶》【市舶則法二十三條】

- 127) 『水利集』卷二「水利問答」, 卷三「至元二十八年潘応武決放湖水」
- 128) 『元典章』卷十九「戸部五・田宅」《官田》【影占係官田土】、《民田》【漏報自己田土】、【田多詭名避差】によれば、至元二六年三月の時点で行大司農司であることはまちがいないが、『龍虎山志』卷中「大宗師」《総撰道教》に記録されるクビライの命令文では、冒頭の宛先が“行尚書省の官人每根底、行御史台の官人每根底、行司農司の官人每根底、宣慰司の官人每根底、城子裏達魯花赤官人每根底、来往行踏的使臣每根底、管軍の官人每根底、軍人每根底、百姓每根底宣諭すの聖旨”となっている。
- 129) 『程雪樓文集』卷二「資徳大夫湖広等処行中書省右丞燕公神道碑銘」。『道園学古録』卷二〇「翰林学士承旨董公行状」によれば、至元二五年から二七年の間に董文用が大司農となったとあるが、この時期テゲが大司農である。その下の“大司農卿”の誤りではないか。なお、同じ『道園学古録』の卷四二——大司農司、宣徽院、経歴院、提刑按察司の職をわたりあるいた趙思恭の一生を述べる「趙公神道碑」も、この時期、董文用がたしかに大司農司にいたこと、サンガの弾劾を行ったことをつたえる。
- 130) 『永楽大典』卷二六〇八「憲台通紀」【勸農司復併入按察司】。そこでは、“行司農司の裏の勸農司の衙門を將て罷め了”、としかいっていないが、『大元官制雜記』「巡行勸農司」、「初立巡行勸農司条画」、『元史』卷十六「世祖本紀」[至元二七年三月庚申]は、雅文漢文に直すさい、いずれも、行司農司及び各道の勸農管田司をともにやめさせたと解釈している。
- 131) 『元史』卷十六「世祖本紀」[至元二十八年正月壬戌]、『牧業脞語』卷十四「誅大奸頌」
- 132) 『燕石集』卷十二「司農司題名記」、『道園学古録』卷二二「御史台記」、『大元官制雜記』「肅政廉訪司」、『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《水利》【提点農桑水利】、『通制条格』卷十六「田令」《農桑》、『元史』卷十七「世祖本紀」[至元二九年閏六月]。なお、『元史』卷九三「百官志」は、勸農司の肅政廉訪司への合併を至元二九年に誤る。
- 133) 『救荒活民類要』「元制」《農桑》、「救荒一綱」《義倉》、『元典章』卷三「聖政二」《息偾役》、《救荒》
- 134) 『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《立社》【勸農業立事理】
- 135) 『通制条格』卷十六「田令」《理民》
- 136) 『元典章』卷二三「戸部九・農桑」《勸課》【革罷下郷勸農】、『通制条格』卷十六「田令」《農桑》
- 137) 『元史』卷十七「世祖本紀」[至元二十八年三月己酉]
- 138) 『水利集』趙孟頫「浙西水利序」, 卷二「水利問答」
- 139) 『元史』卷十七「世祖本紀」[至元三十年三月己巳]、[至元三十年四月己亥]、『大元官制雜記』「行大司農司」、「初立行大司農司条画」
- 140) 詳細は、別稿にて論ずる。
- 141) 『通制条格』卷十六「田令」《司農事例》
- 142) 『元史』卷十四「世祖本紀」[至元二十三年]“大司農司上諸路学校凡二万一百六十六、所儲義糧九万五百三十五石、植桑棗雜菓諸樹二千三百九万四千六百七十二株”、卷十五「世祖本紀」[至元二十五年]“大司農言：耕曠地三千五百七十頃、立学校二万四千四百余、所積義糧三十一万五千五百余石”、卷十六「世祖本紀」[至元二十八年]“[大]司農司上諸路所設学校二万一千三百余、墾地千九百八十三頃有奇、植桑棗諸樹二千二百五十二万七千七百余株、義糧九万九千九百六十石”。